

P3 合併症を有するダウン症患者における出生後早期の歯科的管理の一症例

Early postnatal management of a Down Syndrome patient with complications

○佐々木康成、釜崎陽子、日高 聖、藤原 卓

Yasunori Sasaki, Youko Kamasaki, Kiyoshi Hidaka and Taku Fujiwara

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・小児歯科学分野

Department of Pediatric Dentistry, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

緒言

ダウン症候群は、出生後初期の成長発育の遅延傾向があり、健常児と比較して合併症の頻度が高い。さらに、慢性的な開口と舌の突出が原因で、呼吸器系障害や咬合異常が生じる。このように臨床上および成長発達上の問題があるにもかかわらず、出生後早期の歯科的管理法は確立されていない。そこで、心疾患と口唇口蓋裂を合併したダウン症患者の歯科的早期管理の一例を報告する。

症例

生後 41 日齢のダウン症男児が、経口でのミルク摂取開始を目的に、当院小児科から歯科紹介された。既往歴として、心内膜床欠損症のための一次手術後および口唇口蓋裂があり、経鼻チューブによりミルク摂取されていた。そこで、Hotz 床を装着し哺乳指導を行った。さらに、口唇閉鎖と舌突出の改善のための機能促進を目的として、5 ヶ月齢より Hotz 床に口蓋ボタンを付与した機能促進床を装着した。

結果と考察

Hotz 床装着と哺乳指導開始から 75 日後、必要な哺乳全量の経口摂取が可能となり、経鼻チューブが除去された。経口からの哺乳量の増加に伴い体重は増加し、全身成長は改善した。研究用模型の評価から、口蓋裂隙は、口蓋裂手術の前まで経時的に縮小した。また、機能促進床の使用により、口唇閉鎖の回数増加と、舌突出の減少が認められた。以上の結果より、心疾患および口唇口蓋裂を有する本ダウン症患者に対し、出生後早期からの歯科的管理が成長発育に重要な役割を果たしたことが明らかとなった。